

乳幼児期の生活×性の多様性 3人座談会

北山 ひと美

KITAYAMA Hitomi
和光小学校・和光幼稚園園長

浦野 匡子

URANO Masako
和光幼稚園教諭

飯田 あきる

IIDA Akiru
ダイバーノン代表（司会）

飯田 新型コロナの影響を受けて、オンラインで座談会を行いました。

飯田が司会進行役となり、北山さんと浦野さんにお話を伺いました。主に、お二人がお勤めの和光幼稚園の日常から、園児・保護者・保育者にスポットを当てたお話です。

すべての幼稚園や同時期の子どもに共通するとは限りませんので、読者の皆さまには、ご自身の思考の足掛かりとしていただければと思います。

“性の多様性” が感じられる場面とは？

飯田 それでは、早速まいりましょう。乳幼児の生活に関して“性の多様性”が感じられる場面というのがありますか？

浦野 私は昨年、入園したばかりの3歳児クラスの担任でした。思い返すと…

●エピソード1：ままごとコーナーの日常

園には“ままごとコーナー”があり、衣装がたくさんあります。腰の部分にゴムになっているスカートやエプロン。他にも、様々な布があるので、

マントにしたり、三つ編みにして頭にのせたり、子どもたちは好きに工夫して遊んでいます。女の子も男の子も、比較的自由です。もちろん中には「男だからこの役」「私は女の子だからこれ！」とジェンダー役割を強く表す子もありますが、スカートを履いてお母さん役をしている男の子や、折り紙で剣やベルトを作って、戦いごっこをする女の子もいます。

浦野 このように、いわゆる性別越境的な姿は、子どもに日常的にみられると思います。ひとつの生活場面から性別違和やトランスジェンダーをすぐに意識するのではなく、私は「困っている子はいないかな？」という視点で見守るようにしています。「どうしたの？」と声を掛けたり、子どもからの訴えをよく聴いたり、自分の気持ちを言葉で伝えられないこともあるので様子をよく観察したり。そこから様々な可能性を私が想像します。その可能性の中に性別違和が浮かぶことはあります。子どもたちには、困ったときに自分で伝える言葉をもってほしい。誰かに相談したり、伝えたりしていいんだとわかってほしいなと思っています。

北山 性別違和に関して、私は2つの事例を思い出しました。

●エピソード2：Aさん（3歳） そんな服着ないし

お母さん「うちの子は女の子ですが、僕って言うし、自分のことを男の子と思っているようです。心配です。もし男の子なら受け止めてあげたい。」

北山「この年代にはよくあることなんです。仲良しの子や兄弟が僕って言うていたら、本人も同じように僕と言ったり、同じようにズボンを履きたがったり。今すぐ判断するのではなく、少し様子を見ていきましょう。」

Aさんにはお兄さんがおり、影響を受けている可能性も考えられます。

5歳になった頃。5歳児は、遊びやグループが、男女に分かれはじめる頃です。Aさんは男の子の遊びグループにいました。あるとき、ジェンダー

実践・幼稚園

をテーマに、絵本を使って子どもたちとやりとりをする授業が行われました。女の子の服装に対しては「そんな服着ないし」、かわいい人形に対しても「好きじゃないし」とはっきりと言います。お母さんがAさんを柔軟に見守っていたから、本人も自分の意見を自然にかつ堂々と主張できたのかなと私は感じました。この頃のAさんの1人称は「僕」ではなく「私」でした。でも、ふだんは男の子たちといっしょに遊んでいます。まわりの子どもたちも見慣れているので、「変」「どうして？」のような否定的な反応は見られません。本人も自然に遊んでいます。

●エピソード3：Bさん（5歳） ピアノ発表会のお洋服

お母さん「うちの子は男の子ですが、外へ遊びに行くときにスカートを履きたがります。買ってほしいと言います。」

北山「どうするんですか？」

お母さん「買ってあげます。」

私は少し驚きました。園での日常生活は、見るからに“男の子”、Tシャツに短パンで毎日走り回っていたからです。いわゆる“男の子らしい”短髪に大きなリボンのカチューシャを付け、ひらひらスカートのBさんを、周囲の人たちが驚いた顔で見るそうです。

お母さん「本人はそんな周囲の反応を全く気にしません。」

北山「それなら良いのではないのでしょうか？」

Bさんにきょうだいはいません。お父さんは違和感をもっているようですが、あまり子育てに関われず、意見を発するタイミングがないようです。

お母さん「もうすぐピアノの発表会があって、本人はドレスを着たがるのですが、Bがドレス姿で舞台にあがると、お客さんが服装のことでざわついてしまうのではと心配です。Bのピアノ演奏を集中して聴いてもらいたいのです。」

北山「本人にその心配を伝えてみてはどうでしょう？好きな格好をするのは良いけれど、世の中にはこんな反応をする人もいますよ。」

お母さんはBさんに話しました。そのうえで本人が希望したオレンジのドレスを購入。もう1着、ピンクのズボン＆ジャケットも、Bさんの「これでもいいかな」の一言で追加購入。当日、Bさんが選択することになりました。当日選ばれたのは…ピンクのズボン＆ジャケットの方だったそうです。

飯田 浦野さんのお話にも登場した“困り感”。北山さんの2つの事例共に、困り感をもっているのは、相談者のお母さん、つまり保護者なんですね。子ども本人は…。

北山 生活から性の多様性を学ばなければいけないのは、まずは大人の方だと思います。ジェンダーもセクシュアリティも、長く生きてきている大人の方が、固定観念の刷り込みは強く根深い。そこから抜け出すには学びは必須ですね。

性的指向の視点では？

飯田 性別違和に関する事例をお話頂きましたが、“性の多様性”には性的指向の視点もありますよね。こちらはいかがですか？乳幼児期の子どもに恋愛観というののは難しいかもしれませんが、家族や保護者のパートナーシップも含めて。

北山 和光幼稚園では、同性カップルを明らかにする保護者のお子さんが入園を希望されたことはこれまでありません。ただ、だからといって、いなかったとは言いきれません。異性のパートナーと子育てをしている保護者でも、その方の性的指向がどうかというのは、私たちにはわかりませんし、聞いたりすることでもありません。私たちは、様々なパートナーシップや家族があるということを、念頭において行動しなければと思っています。

浦野 実は私、少し気になることもあるので、お話してもいいですか？

●エピソード4：浦野さんの懸念

今後、はっきりと同性カップルを公言する保護者の方がいらしたとき、その保護者が「同性カップル保護者の代表」のようになってしまうことを懸念しています。何かトラブルが起きたとき、何か力を発揮してそれを護えるとき、私たちはどうしても際立つ属性にスポットライトを当ててしまいがちです。ひとつの属性（特徴）が、イコールその人のように語られてしまう。たとえ、肯定的な言い回しであったとしても、その期待は積み重なれば大きなストレスになり兼ねません。障がいなど、マイノリティとされる特徴や属性全般に共通しますが、個性のある“ただの”人間であり、保護者のひとりなんだということを、あえて意識しておく必要もあるのかなと。多様性を尊重するということは、違いや個性はもちろん大切ですが、一方で同じ人間に過ぎないという共通の性質もバランスよく意識していたい、そして属性よりも目の前の“人”を見て人間関係をつくることができる自分でいたいと私は思っています。

リアルはきれいごとでは済まない！？

飯田 人権のテーマって、属性をピックアップして扱うものが多いですもんね。私たちは属性と関係性をつくっているわけではなく、もっと多要素で複雑なリアルの人間相手なんだということですね。現場で起きるリアルなトラブル、問題解決は大変なのでは？

北山 少し性の多様性とは異なりますが…

●エピソード5：北山さんの発言

和光幼稚園では、障がいをお持ちのお子さんも積極的に受け入れ差別や偏見なく共に学んでいくという共通理念があります。「障がいがあるとか

ないとか関係なく」と、保育者も保護者も普段は理解していても、トラブル時には、障がいや特性を攻撃する言動が見られることもあります。乳幼児だって、偏見や差別が表に出ることや、どろどろした人間関係になることもあるのです。例えば、トラブルや喧嘩の中で、我が子が被害を受けた保護者からしたら、理念より我が子を守って！ と強く思います。親としての感情が前面に出してしまうのは自然なこと。私たちとしては、このような、親としての感情が大きく揺さぶられる場面でも一度冷静に立ち止まって考えられるおとなの集団をつくりたいと思っています。しかし、現実はその簡単にはいきません。正論ではうまく進まないことやきれいごとでは済まないリアルが、現場には多々あるのです。

解決していくには、経験上、時間をかけて向き合っていくしかないと思います。異なる人間同士、それぞれの利害や正義が対立する中で、話し合い、時には傷つけあったりもしながら、あきらめず着地を試みていく。大人も子どもも、理念に向かって、苦しみながら集団全体で模索していくしかないのだと思います。

浦野 解決について、立場が違うからこそできることもあると思います。保護者同士では、想いがぶつかったり、互いに言いづらかったりすることもあるかもしれませんが、異なる立場の私たち保育者が、より多様性を意識した言動で、冷静に客観的に関わることで、新しい解決の糸口を見つけられることもあると思います。同様に保護者の皆さんから、保育者が助けられることだってあるのです。

このあたりは“保育者が保護者のトラブルに対して”という方向のエピソードトークになってしまっているのですが、逆の矢印も少し入れた方が上から目線にならずに済むのではないかと思います。

性の多様性尊重の姿勢を周囲へ広げていくために

飯田 性の多様性尊重の姿勢で、様々な角度から学び考え、きれいごとでは済まないリアルに向き合い続けているお二人ですが、その性の多様性尊重の姿勢

実践・幼稚園

を周囲へ広げていくために、お二人が意識していることや実践されたことはありますか？

浦野 園児への声掛け、私の事例ですが…

●エピソード6：「〇〇だと思う人～」「よくわからない人～」

壁から壁までひたすらよーいドンをして遊ぶ時間がありました。3歳児ってこれを何往復しても飽きないんですね。慣れてきたら、条件付け。「赤い服の人ドン」とか、「赤」って言うだけで赤を身につけた人が走ったり。ピンクでも自分が赤だと思ったらOKです。ある女の子が「女の子って言って」と私にリクエストしました。私は「女の子だって思う人～」と言いました。ここで走る男の子もいました。次は「男の子だって思う人～」。ここで走る女の子もいます。最後に「よくわからない人～」と言ったら、2～3人の子が走りました。1度も走らない子もいます。これが正解だとは思いますが、多様性を学ぶと、多様性を意識した言葉を選ぼうとしている自分に気づきます。

後日このエピソードを保護者の皆さんにもお話して、性の多様性のこと、多様な選択肢の提案、性別意識も曖昧な子どもの成長を一緒に見守ってほしいという私の想いを伝えました。

北山 保育者の人たちが学んでいるかどうか、これは大きいですね。保育者の学びによる変化ですが…

●エピソード7：着替え場所これでいいの？

私は、保育者や保護者に向けて、定期的に性教育の学習会を開いたり、日常から性に関する気付きを会議でお話したりしています。保育者の学習会で、

プライベートゾーン／パーツを意識させ、自分のからだの大切さを学ぶことは幼少期から大切だという話になりました。すると、ある保育者が、着替え場所について発言をしました。それまで園児たちが水着に着替えるときは、何歳児であろうと男女関係なく、保育者が管理しやすい場所で着替えさせていました。つまり大人目線の効率重視。でも、これではプライベートゾーン／パーツの自覚や、自分のからだの大切さを感じることはできないのでは？ という気付きの共有です。こんな風に、それまでの当たり前にちょっと立ち止まったり、子どもの立場になったり、多角的に物事を考えられるようになっていく。大人も学びによって成長し、行動を変化させていくんだと、私自身実感しました。

北山 保護者への働きかけではこんなこともありましたね…

●エピソード8：「お父さん会」から「森をつくる会」へ

幼稚園には子どもたちが遊ぶための小さな森があります。定期的な整備を保護者に手伝ってもらうのですが、それを行ってくださる組織の名前は「お父さん会」でした。お父さん会の行事では、お父さんは力仕事、お母さんは食事準備と子どものお世話、のように性別役割分業が明確でした。ずっと気になっていた私は、あるときふと呟きました。「木を切るのが得意なお母さんもいるのでは？」すると副園長が「そうですね。名前を考え直しましょう。」そして「森をつくる会」に名前が変わりました。

とはいえ、実際には性別役割分業は継続されています。例えば、お餅つきの餅つき役。性別関係なく誰でも募集しても、申し出てくれるのは男性保護者ばかり。組織名を変えても発信に気を付けても、自身が行動を起こしたり、「自由でいいじゃん」と声をあげたりできるようになるには、もう少し時間がかかりそうです。それでもこうした小さな変革を仕掛け続けていくことで、道は開けると信じています。

実践・幼稚園

北山 もうひとつ、環境面に関してですが…

●エピソード9：トイレの表示も脱ステレオタイプ

和光幼稚園の1階には、個室のトイレが3つ並んでいます。来客用を兼ねているトイレなのですが、これまでは車いすも入れるトイレ以外は、よく見られる「女性用の赤い人型」、「男性用の青い人型」表示でした。2年前に下図の絵に貼り換えました。できるだけ男性、女性のステレオタイプにならないイラストにしました。このトイレは、園児たちはもちろん、併設する小学校の子どもたちも日々目にします。だからこそ、少しでも子どもたちのバイアスをつくらないようにという、保育者の工夫のひとつです。



ラストメッセージ

飯田 残念ながら、お時間が迫ってまいりました。最後に一言お願いします。

浦野 以前、保護者会の中で、保護者から「性教育って何歳から始めるんですか」と質問がありました。「赤ちゃんが生まれたときに、からだのつくりが女の子だったらピンク、男の子だったら水色の服を着せていたりしませんでしたか？ 名前も昔は女の子には〇〇子とかつけていました。私たち大人は子どもが生まれた瞬間から、性に関わる知識や感覚を子どもに伝えていきます。性教育は人権の学びなので、0歳から始まっていると思っています。」と保護者に伝えました。

その数ヶ月後の北山先生による保護者向けの学習会があり「確かにピンクの服をよく着せていました。親である自分が子どもに女の子、女の子って押し付

けていくのは、何か違うんじゃないかと思うようになりました。本人の性自認が確立していないかもしれないのに、“女の子らしい”服装をさせているのもあれ？ って。ちょっと自分が立ち止まるきっかけになりました。」という感想が届きました。少なくとも私自身にとって安心して過ごせる社会は、性教育、つまり人権を大切にする感覚のアンテナが高い人が多い社会です。そのために、私自身が学び続けること、同僚や保護者や子どもたちに投げかけながら一緒に考えることを大事にしていきたいと思います。

北山 乳幼児期は、人間の人生の基盤をつくる大切な時期です。幼ければ幼いほど、そこに関わる大人の感覚はとりわけ重要です。既に、性に溢れている園児たちの日常生活、私たち保育者が、どれだけ性教育や性の多様性を意識して子どもに関わるか、また保護者に関わるか。きれいごとだけでは進まないリアルに対しても、伝え方や学び方をいかに工夫し続けられるか。私たちの学園には「三位一体」というキーワードがあります。保育者と保護者と子どもが一緒になって学び考えていく集団を目指す、性の多様性に関しても例外なく、そう思います。

飯田 北山さん、浦野さん、本日はありがとうございました。ここから先は読者の皆さんに、委ねたいと思います。お二人のお話から、あなたはどんなことを考えましたか？

北山 ひと美 (きたやま ひとみ)
幼稚園で3年、小学校で29年担任として子どもたちと向き合い、7年前から現職。性教協「乳幼児の性と性教育サークル」代表。



浦野 匡子 (うらの まさこ)
和光幼稚園教諭。数年前から性教育を学ぶ。性教育は乳幼児期の生活そのものを支える学びだと考えている。性教協「乳幼児の性と性教育サークル」会員。



飯田 あきる (いしだ あきる)
ダイバーノン代表。多様性や人権をテーマに、講師やファシリテーターを務める。『月刊健康教室』（東山書房）にて『ダイバーノンカフェ』連載中。

